

## 岩崎灌園『草木育種』前編について

そつもくそだてぐさ

田中実穂\*

### 目次

はじめに

一・江戸時代の園芸書と『草木育種』

二・岩崎灌園について

三・『草木育種』前編に見る当時の園芸の一例  
おわりに

キーワード 園芸 岩崎灌園 『草木育種』 『花壇地錦抄』

### はじめに

江戸東京博物館の平成二五年度特別展「花開く江戸の園芸」は、江戸時代における「園芸」という、植物に対する人間の積極的関与の方法や成果を、錦絵をはじめとした絵画や刷物、版本などの三三三件の資料により紹介した。

展示資料のうち、版本は三七件と約一割であり、その内容は地誌、図譜、そして植物の特性と栽培の技術を記した園芸書である。園芸書のなかでも、本稿で取り扱う岩崎灌園の『草木育種』前編は、日本や中国における先達の園芸書を参照しながら、一九世紀前半における植物の栽培に必要な条件や方法について余さず記述しており、当時の人々を取り巻

く植物の多様さと、植物を確実に栽培するための高度な技術が読み取れる。本稿では『草木育種』前編の概要をとおして、江戸時代における園芸の一例を紹介する。

なお、『草木育種』は岩崎灌園による前編と、灌園の弟子である阿部櫟斎（喜任）による後編があるが、今回は前編のみの取り扱いとする。本来は後編も併せて『草木育種』と取り扱うべきであるが、ひとえに筆者の力不足であり、今後の課題としたい。

### 一・江戸時代の園芸書と『草木育種』

「園芸」は、「園」という区切られた土地における野菜・果物・草花などの栽培、またはその技術をいう。江戸時代は植物や園芸についての著作が多く見られるが（表1）その内容は左記のとおりに大別することができる。

#### （一）事典類

中村惕斎『訓蒙図彙』や貝原益軒『大和本草』、寺島良安『和漢三才図会』は植物のみならず、自然界に存在するあらゆる事物を収録している。そのうち『和漢三才図会』は、明の李時珍による『本草綱目』を典拠としており、各植物の特徴と人間の身体における効能を解説するが、鶏冠木・梅・桜・蓮・蘭は、色や形が異なる品種が記載される。芍薬や

\* 東京都江戸東京博物館学芸員

〔表1〕江戸時代に刊行された主な植物・園芸書

発行年	分類	書名	作者・編者
寛永14 (1637)	本草	本草綱目	李時珍、野田弥次右衛門板
寛文6 (1666)	事典	訓蒙図彙	中村惕斎 編
延宝8 (1680)	庭園	余景作り庭の図	菱川師宣 画
延宝9 (1681)刊	園芸	花壇綱目	水野元勝 著
貞享3 (1686)刊	植物(キク)	菊譜百詠図	徳善斎(明) 編
貞享5 (1688)	園芸(ボタン)	牡丹名寄	
元禄2 (1689)	園芸(ボタン)	刊誤牡丹鑑	
元禄3 (1690)	植物(キク)	伊奈伝草(菊譜)	万葉軒／華新 著 東山潤甫 画
元禄4 (1691)刊	絵画(キク)	画菊(菊譜)	建仁寺(東山)潤甫
元禄5 (1692)	園芸	錦繡枕	伊藤伊兵衛(三之丞)
元禄8 (1695)	事典	頭書増補訓蒙図彙	中村惕斎 編
元禄8 (1695)	園芸	花壇地錦抄	伊藤伊兵衛(三之丞)
元禄11 (1698)刊	植物	花譜	貝原益軒(元禄7年序)
元禄12 (1699)跋	園芸(ボタン)	牡丹道知辺	杉岡／梅陰軒
元禄12 (1699)	園芸(キク)	千代見草(菊の道しるへ)	西京園丁
元禄12 (1699)	植物	草花絵前集	伊藤伊兵衛(政武)
宝永元 (1704)	本草	諸菜譜	貝原益軒
宝永6 (1709)刊	本草	大和本草	貝原益軒(附録・諸品図は正徳5年刊)
宝永7 (1710)刊	園芸・本草	増補地錦抄	伊藤伊兵衛(政武)
正徳3 (1713)	園芸(キク)	秋意古新集(菊花形品定)	田辺彦兵衛
正徳3 (1713)	園芸(キク)	後の花(新板当世修菊之法)	霽月堂丈竹
正徳5 (1715)跋	事典	和漢三才図会	寺島良安(正徳2年序)
正徳5 (1715)刊	園芸(キク)	花壇養菊集	志水閑事
享保元 (1716)刊	園芸(キク)	菊花羽二重	志水閑事
享保2 (1717)	本草	怡顔斎竹品	松岡玄達
享保4 (1719)刊	本草	広益地錦抄	伊藤伊兵衛(政武)
享保8 (1723)	植物(アサガオ)	朝顔明鑑抄	三村森軒
享保13 (1728)刊	本草	怡顔斎蘭品	松岡玄達
享保18 (1733)刊	園芸・本草	地錦抄付録	伊藤伊兵衛(政武)
享保20 (1735)自序	庭園	築山庭造伝	北村援琴 著／藤井重好 画
享保21 (1736)刊	植物(キク)	扶桑百菊譜	百鞠亭児素仙
元文2 (1737)自序	植物(フクジュソウ)	画本福寿草	大岡春ト 著／大岡春川 画
元文2 (1737)	植物(モミジ)	百色紅葉集	伊藤伊兵衛(政武)
宝暦5 (1755)刊	植物	絵本野山草	橘 保国 画
宝暦5 (1755)	植物(キク)	菊経国字解	松平頼寛 著／白土盛隆 注／戸崎允明 校
宝暦6 (1756)刊	植物(キク)	酈園百菊譜	松平頼寛
宝暦8 (1758)刊	本草	怡顔斎桜品	松岡玄達
宝暦9 (1759)刊	本草	花彙(草部)	島田充房
宝暦10 (1760)刊	本草	怡顔斎梅品	松岡玄達(宝暦8年跋)
宝暦13 (1763)刊	博物	物類品隲	平賀源内 編／田村善行など校
安永2 (1773)刊	本草	花彙(木部)	小野蘭山
天明8 (1788)写か	植物(ツバキ)	椿花形附覚帳	伊藤徳右衛門 編
寛政元 (1789)刊	園芸	花壇叢木画譜	
寛政8 (1796)	本草	本草和名	深江輔仁 著／多紀元簡 校(原著は延喜年間成立)

発行年	分類	書名	作者・編者
寛政9 (1797) 刊	本草(カラタチバナ)	橘品	卉花亭主人
寛政9～10 (1797～98)	本草(カラタチバナ)	橘品類考	灌河山人(文屋茂喬) 著
寛政9 (1797) 刊	園芸(カラタチバナ)	素封論	黄道沙門
享和3 (1803) 刊	本草	本草綱目啓蒙	小野蘭山 述
文化元 (1804)	博物	成形図説	島津重豪 著／白尾国柱など編
文化4 (1807)	園芸(キク)	芳菊草稿	飯島文常 著
文化6 (1809) 跋	博物	物品識名	岡林清達 稿／水谷豊文 補・編
文化9 (1812) 刊	本草(秋の七草)	秋野七草考	北野秋芳(菊鶯) 著
文化11 (1814)	本草(春の七草)	春の七草考	北野秋芳
文化12 (1815) 刊	植物(アサガオ)	牽牛品類図考	峰岸竜父
文化12 (1815) 刊	園芸(アサガオ)	花壇朝顔通	壺天堂主人 著／森 春溪 画
文化13 (1816) 序	本草	救荒本草通解	岩崎常正(灌園) 著
文化14 (1817) 刊	本草(アサガオ)	あさかほ叢	四時庵形影(文化13年自序)
文化14 (1817)	植物(カキツバタ)	杜若考	岩崎常正(灌園) 著
文化15 (1818) 刊	本草(アサガオ)	丁丑朝顔譜	秋水茶寮 著／濃淡斎 画(文化14年著者付言・文化15年蜀山人序)
文政元 (1818)	本草(アサガオ)	牽牛花水鏡 前編	秋水茶寮 著
文政元 (1818) 刊	園芸	草木育種 前編	岩崎常正(灌園) 著
文政2 (1819) 刊	植物(アサガオ)	牽牛品	峰岸竜父 著／丹羽桃溪 画
文政6 (1823) 自序	本草	草木性譜	清原重臣 撰／沼田月斎・水谷豊文等 画
文政7 (1824) 刊	茶道・花道	茶席插花集	柿園 著／芳亭野人 編／岩崎常正 画
文政7 (1824) 自序	物産	武江産物志	岩崎常正(灌園) 著
文政10 (1827) 刊	地誌	江戸名所花暦	岡山鳥 著／長谷川雪旦 画
文政10 (1827) 刊	本草	草木奇品家雅見	種樹家 金太 編(文化7年序)
文政11 (1828) 刊	園芸	通賢花壇抄	屋代通賢 著
文政11 (1828) 自序	本草	本草図説	岩崎常正(灌園) 著
文政12 (1829) 刊	本草	草木錦葉集	水野忠暁 著／大岡雲峰・関根雲停 画
文政12 (1829) 刊	本草	泰西本草名疏	ツェンベリー 著／伊藤舜民 訳
天保元 (1830)	園芸	養難養説	久須美蘭林 著
天保3 (1832)	本草	草木図説 後編	飯沼慾斎 著
天保4 (1833) 序	園芸(オモト)	万年青譜	長生舎主人 著
天保4 (1833) 序	植物	植学啓原	宇田川榕庵 著
天保6 (1835)	植物(チョウセイラン)	長生草	秋尾亭蒼山
天保7 (1836) 跋	園芸(マツバラン)	松葉蘭譜	長生舎主人 著
天保8 (1837) 序	園芸	草木育種 後編	阿部喜任 著
天保8 (1837) 刊	本草	質問本草	呉 継志 著(寛政元序)
天保8 (1837) 刊	園芸(マツバラン)	松蘭譜	深見延賢 編／石川貫河 画
天保10 (1839) 刊	本草	百品考	山本亡羊 著 (弘化4年二編、嘉永6年三編刊)
天保9～10 (1838～39)	本草(ニシキラン)	錦蘭品さため	帆兮亭
天保年間(1830～43)	園芸	金生樹譜 別録	長生舎主人 著
天保年間(1830～43)	植物(ニシキラン)	にしきかがみ	
弘化2 (1845) 刊	本草	紫藤園攷証	畔田伴存 著
弘化3 (1846) 刊	園芸(キク)	菊花壇養種	菅井菊叟 作／溪斎英泉 画

発行年	分類	書名	作者・編者
嘉永元(1848)刊	園芸(マツバラ)	竺蘭伝来富貴草	東是久貫 著
嘉永6(1853)序	本草	本草通串証図	前田利保 著
嘉永3(1850)序	本草	拾品考	野田青霞 著／石崎融斎 画
嘉永2(1849)刊	本草	本草綱目啓蒙図譜	井口望之 編
嘉永4(1851)刊	花道	剪花翁伝 前編	中山雄平 著／松川羊山 画(弘化4年自序)
嘉永5(1852)刊	本草	奇草小図	藤沢 周 ※ 日新会写生
嘉永5(1852)		本草図説(未完)	高木春山
嘉永7(1854)刊	植物(アサガオ)	三都一朝	成田屋留次郎 著／田崎草雲 画
嘉永7(1854)刊	絵本(アサガオ)	朝顔三十六花撰	万花園主人 撰／服部雪斎 画(嘉永7年杏葉館鍋島直孝序・自跋)
安政2(1855)	植物(シャクヤク)	花相花鑑	栩々園耽花 著
安政2(1855)刊	園芸(アサガオ)	両地秋	成田屋留次郎 著
安政4(1857)刊	園芸(アサガオ)	都鄙秋興	幸良弼 著／野村文紹 画
万延元(1860)序	植物(シャクヤク)	芍薬自讃花集	栩々園耽花 著
文久元(1861)刊	本草(アサガオ)	朝閑々美	東雲亭 著／葛通斎文岱 画
慶応元(1865)刊	植物(サクランウ)	桜草百品図	行方水谿 著

小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べ 園芸文化の到来』(青幻舎、2008年)、国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベースより作成

菊に至っては百種類以上を数え、土地や人名、花色にちなんだ「数かずの品種」が存在する牡丹は、植物の項において唯一、栽培の方法や注意点が記述されている。<sup>(1)</sup>

## (二) 種類別ごとの解説本など

江戸時代において、広く人々に好まれ、季節ごとに鑑賞の名所となる梅や桜、菊は、江戸時代をとおして画帳や図譜、栽培方法を解説した多くの書物が作られた。特に菊は、松平頼寛『菊経国字解』、菅井菊叟『菊花壇養種』において、菊の生育の時期と害虫の活動時期の重複を鑑みてか、害虫の詳細な図と具体的な駆除方法が記されているなど、他の植物にはない特徴が見られる。

その一方、寛政九年(一七九七)から一〇年(一七九八)にかけて、カラタチバナ(唐橘・百両金)<sup>(2)</sup>の品種を集めた『橘品』『橘品類考』『素封論』が相次いで刊行された。葉の形や色の微細な違いに鑑賞価値を見出し「百両金」の名のとおり、珍しい品種が多額の利益を生み出すという傾向が、植物においてより顕著になった。<sup>(3)</sup>

文政年間(一八一八～一八三〇)には岡山烏著・長谷川雪旦画『江戸名所花暦』により、従来の梅や桜などの花木のみならず、桜草や朝顔、萩といった草花の名所も紹介され、江戸における花の名所が拡大した。あるいは、前述のカラタチバナと同じく、主に葉の形や色、「斑」と称される様々な模様の違いを比較、鑑賞し、珍しい特徴を持つ品種を所持者とともに記録した繁亭金太編『草木奇品家雅見』や、多様な葉の図とあわせて、葉の模様を保持するための栽培方法を詳説した水野忠暁『草木錦葉集』が刊行された。天保年間(一八三〇～四三)に刊行された長生舎主人『金生樹譜別録』には、植物を演出するための彩色豊かな鉢や盆、また鑑賞や栽培に最適な環境が示されている。オモト(万年青)<sup>(4)</sup>やマツバラ(松葉蘭)<sup>(5)</sup>、チョウセイソウ(長生草・長生蘭・石斛)



(6)、キンシナンテン(金糸南天)<sup>(7)</sup>という、あくまでも葉姿を重視する植物についても、『万年青譜』『松葉蘭譜』(いずれも『金生樹譜』の一つとして刊行)、秋尾亭蒼山『長生草』などの図譜にまとめられている。これらの植物は現在、伝統園芸植物と称され、多色が施された鉢とともに、栽培や鑑賞の方法が継承されている。

江戸時代後期に明確になった、珍しい植物に対する関心は、文化・文政年間、及び嘉永・安政年間(一八四八―一八五九)のアサガオ(朝顔・牽牛花・薺)に、より集約されたと言えるだろう。アサガオの変化は享保八年(一七二三)に尾張藩士の三村陳富による『朝顔明鑑抄』に記録されるが<sup>(8)</sup>、一九世紀になると、珍しい形状の品種が比較、位付けされる花競べが寺社の境内などで行われ、その結果の多くが、番付や図譜として刊行された。文化一四年(一八一七)四時庵形影『あさかは叢』、文政元年(一八一八)秋水茶房瘦菊『丁丑朝顔譜』や、安政元年(一八五四)万花園『朝顔三十六花撰』が該当する。なお、葉や花が変化したアサガオは、例えば『あさかは叢』には、「須磨の浦」「飛鳥川」「みよし野」などの、おそらく見た目から想像された名前が付されるが、三七年後に刊行された『朝顔三十六花撰』では「堺渦燕葉藤鳩村雲紋車咲度サキ(咲)」と「葉の色・形状」「花の色・形状」を並べた表記に変更、統一されていく。その理由として、アサガオの変化があまりにも多種多様になり、見た目による名付けが困難、または混乱の原因となるため、葉と花に現れる変化の法則に基づいた名付けが考えられる。<sup>(9)</sup>なお、現在作出される変化アサガオの名付けにも、この方法が使われている。その他、刊本ではないが、松平定朝(菖翁)による「花菖蒲培養録」は、ハナシヨウブの栽培方法と、定朝が作出した珍しい品種が記載されている。

江戸時代には、本草としての植物研究が進展する一方で、名木や群生地の名所化、及び限られた種類への興味関心、あるいは嗜好性が高まり、

種類ごとの図譜や解説が盛んに作られた。では、これらの植物はどのように栽培されていたのか。<sup>(3)</sup>では栽培の条件や技術を説いた書物を挙げていく。

### (三) 植物の栽培(園芸)について

文政元年(一八一八)に刊行された『草木育種』前編は、著者の岩崎灌園が日本と中国の園芸に関する書物を参照しつつ、自身の考えを述べながら展開させていく。そのうち、多く引用されるのは水野元勝『花壇綱目』と、『地錦抄』こと伊藤伊兵衛三之丞『花壇地錦抄』である。これらは植物の栽培方法について、各種類の特徴と土壌や水利などの諸条件から説いており、広く栽培、園芸を知らしめた功績は大きい。

『花壇綱目』は延宝九年(一六八二)の刊行であり、最初の園芸書と言われているが、著者の水野元勝の素性や生没年は不明である。内容は「花壇」の花を春・夏・秋・冬・雑に分け、それぞれの色や開花期、必要な土壌や肥料が簡潔に記される。土壌と肥料は種類ごとに特徴と適した植物を示すが、牡丹と蘭は別項で栽培方法を解説しており、当時における花の優先度が伺えるようで興味深い。

『花壇地錦抄』は江戸染井の植木屋、伊藤伊兵衛三之丞による園芸書で元禄八年(一六九五)の刊行。伊兵衛三之丞は付近の大名屋敷に作庭された庭園の維持管理を務めつつ、植木屋を営むかわら、植物の栽培と適切な取り扱いを<sup>(10)</sup>、ふりがな付の平易な文章で著した。

その構成は牡丹・芍薬を筆頭に、木の類・四季の草花・草木植作様となる。特に「草木植作様」では、植物ごとに植え頃、使用する土や肥料の種類、接木や挿木を解説し、その数は二四一種類にも及ぶ。土は「忍土」「真土」「野土」「赤土」「砂」「肥土」「田土」、肥料は「合肥」「くだし肥」「魚洗汁」「田作」とあり、特に各々の特徴については、『草木育種』で、さらに詳説されている。

『花壇地錦抄』の図版編として、元禄一二年(一六九九)に、伊藤伊兵衛政武により『草花絵前集』が著され、さらに続編として『増補地錦抄』、薬草となる植物一九一種類を収録した『広益地錦抄』、「正保年中以後渡り来ル草木ノ類」として外国から渡来した植物の一覧を掲載した『地錦抄附録』がある。これらの『地錦抄』ものは人々に植物の多彩さと栽培の可能性を広め、以後に続く園芸書の本格的な存在として、我が国の園芸史における不可欠な存在になっている。

#### (四)『草木育種』前編の位置づけ

以上、江戸時代に刊行された園芸や植物についての著作を概観したが、本稿にて取り扱う『草木育種』前編は、前項(三)の『花壇綱目』『花壇地錦抄』を参照しつつ、項目を増やし、「接木」「挿木」についても、その方法を図入りで詳細に解説する。また、栽培方法を示す植物は、鑑賞や趣味嗜好の対象となる花物・薬物だけではなく、稲や麦などの農作物にまで及ぶ。観て楽しみ、比べて競うだけではない、食物としての役割を持つ植物の記載が、他の著作とは性格を異にしている。

また、前項(二)では、菊の栽培書の特徴として、害虫の記事が詳細であるとし、他の植物の関連書には見られないとした。但し、記事がない、イコール虫害がないわけではなく、書物の発行目的により、初めから省略している可能性もあるだろう。『草木育種』ではあらゆる植物に共通する害虫(モグラ・ミミズも含まれる)を、図示のうえ図(P82参照)駆除方法を解説する。その中には寛政年間に高値で売買されたカラタチバナの虫害など、当時の所有者の苦勞がしのばれる例もある。些末な事例ではあるが、害虫対策も含めて、あらゆる種類の植物を最適に栽培することを目的とし、先達が蓄積した数々の植物の情報や栽培の技術を集約、自身の経験に基づく方法論をまとめた本書は、江戸時代における園芸の到達点たり得ると思われる。

## 二・岩崎灌園について

ここでは『草木育種』前編を著した岩崎灌園について、他の著作とともに、簡単に解説する。

岩崎灌園は、天明六年(一七八六)に、江戸下谷三枚橋(現東京都台東区上野)の幕臣(徒士)の家に生まれた。名は常正、灌園は号である。

植物を好み、江戸や相模、日光にて調査を行った。文化六年(一八〇九)には江戸に下向した本草学者、小野蘭山に入門する(蘭山は翌年没)。文化十一年(一八一四)には、若年寄、堀田正敦が幕臣の屋代弘賢に編纂を命じた百科事典「古今要覧(稿)」<sup>①</sup>の草木部を担当する。また自宅「又玄堂」<sup>ゆうげんどう</sup>にて本草学の勉強会を行い、植物を学ぶ者への門戸を広く開いた。

文政七年(一八二四)に下谷から谷中へ転居。近隣には、自身が植物、特に薬草木の採取を行っていた道灌山があり、同年に著した『武江産物志』には「道灌山ノ産」として一五種類もの植物を挙げている。

同書には江戸とその近郊で産出される野菜や果物、草・薬草木・虫・魚・鳥・獣の名が連なるが、あわせて「遊観類」として梅や桜、藤や牡丹などの名所と、松や杉、榎といった名木の場所が記載され、江戸の植物名所案内ともなっている。

灌園の著作のうち、特に名高い『本草図譜』は、全九六巻(そのうち六巻は刊行)に及ぶ植物図譜であり、文政十一年(一八二八)に二〇年間をかけて完成した。その他の著作として、『本草穿要』『救荒本草通解』『綱救外編』がある。天保一三年(一八四二)谷中の自宅にて没、享年五七歳。

### 三、『草木育種』前編に見る当時の園芸の一例

『草木育種』前編は全二冊、判型は縦二六cm、横一七・五cmの大本である。見返しには「文化戊寅新鐫 灌園岩崎先生著 草木育種 全二冊 江戸書肆 千鐘房 玉山堂合刻」とあり、屋代弘賢による序文、灌園による自序が続く。前編の上巻には左記の内容が収められる。

#### 「草木育種目録」

##### 卷之上

##### 序 凡例

草木の徳をしるす  
草木に陰陽ある事  
土地の善悪并水之事  
草木に吉日凶日并宜と忌との事  
下種の事  
澆灌并培養の事  
接法 きりつき たかつき よびつき  
わりつき そぎつき さしつき  
水つき  
根つき  
よせつき  
并図

移樹并伐木の事  
登盆の事附り養花挿瓶のの法  
除虫法并虫の図  
暑寒風雨霜雪の前心得の事  
塘窖塗垂の事并図  
種樹運送の事

これらは、いずれも植物の最適な栽培に必要なことであるが、特に今

回は、土壌と肥料、江戸時代に普及した植木鉢の使用法、当時の虫害とその駆除方法についての記述を掲載する。

#### (一) 土の良し悪しと水 (土地の善悪并水之事)

植物の成長に不可欠な要素として、日照と水、土が挙げられる。これらは後から追加が可能な肥料と異なり、先天的な環境に大きく左右され、いわゆる植生を決定づける条件となっている。

「園」という限定された場所において、植物を確実に栽培するには、植物の個体に合わせた条件をなるべく調えること、または、場所に見合った植物の選定、いわゆる「適地適作」が必要である。

なお本文の掲載については、表記はなるべく常用漢字を用い、変体仮名は平仮名に改めた。振り仮名は、植物の栽培について広範な普及を旨とした灌園の目的を鑑みて、原文のとおりとしている(ただし、変体仮名の表記は改めた)。また下線部は、『花壇綱目』『花壇地錦抄』(地錦抄からの引用を示す)。

#### 「前略」

○按るに草木ハ地の毛髪といへり。人も血氣盛ときは毛髪黒して光澤あり。血氣衰ときハ毛髪脱落し。或ハ白して光澤なし。草木もかくのごとく。地氣肥たる所に生れバ常にかわりて花さき実のる。諸国の名産あるも。其物其土地に相応して。且地氣盛処に生るゆへ。食物ハ味よく。薬種ハ効力他州に産すると違ひ。氣味調て奇功ある類なり。又按るに。草木ハ地にもとづくゆへ。土地の品を考ること肝要なり。黒ぼくに好ものあり。赤つちに好物あり。真土によきものあり。砂によきものあり。草木各好む所あり。譬ハ深山幽谷に生る草木ハ。陽性にして清潔なり。故に多くハ陰地を好ミ。糞穢を忌物多し。深山の土黒ぼくなり。故に植る土も又黒ぼくにうゆべし。又海濱に生る草木ハ。陰性

にして魚類の肥を好。真土或ハ砂にうゆへし。又原野に生る草木なれハ。野土にうゆべし。それくの生る本土に植る事第一なり。豫土の品を下にする。

○しのぶつち。地錦抄云。深山に数年木の葉うづもれて。自然に黒土

となりたるをいふ。又荜塚のくさりて土となりたるもいふ。又木の葉を土中へうづむる事。半年にしてとり出せハ土となる。これもしのぶつち

といふ。○花壇綱目に。赤土にしのおくさを切交て。躑躅の類又とり木

さし木に用て妙也。これをもしのぶ土といふ。○按に。年古き山なとハ。厚五寸或ハ一尺ほどの間うへ一重皆此土なり。これ自然に草木の肥し

となる土なり。是に赤土を加へて草の類によし

○武蔵野の土。地錦抄云。巢鴨村辺より。板橋染井筋野土むさし野に

似り。但し黒めなるを上とす。赤めなるハ土の性おとれり。又原地の竹藪をほりて。さらくとしたる黒き土なり。○按に黒ほく土。目黒辺

千駄木辺にもあり。黒ぼくの赤めなるなり。○赤土花壇綱目に蘭。けい

百合。えびね。の類によし。○これハ右の黒ぼくの肥けなきものなり。此土に肥をかけて木の類によし。○又地を二三尺もほりて下にある。

黄色にしてかたくなねばりある土ハ煉てさし木の玉に用ゆ。惣て此土へさ

し木をすればよく根を生ず。又ねらずして粗く砕き盆栽の鉢の底に少し

入れバ水拔よく根腐せず。又細に砕て赤土又野土に交て蘭蘇鉄の類に用

てよく生長す

○葛西の真土。地錦抄云。亀井戸辺より業平隅田川の筋皆真土にて葛西

に似り。小石交りたるハ砂まつちなり。よくふるひてつかふべし。又云

真土ハ砂のやうにて砂もなし黒きやうなる土也。砂のまぢりたるハ砂ま

つちといふ。芍薬によし。真土ハ水仙柑類菊などに少々加へてよし。○按に真土にハ石竹おにゆりひめゆり松梨の類よし。又桃梅もよく肥て早く生長す。但し鉢うへの土にハかたまりて乾き。余り宜からず。水草を植によし

○八王子の砂地錦抄云。目黒辺にもまゝあり。雑司ヶ谷王子筋大方似る砂なり。但し白めなるを上とす。赤め黒めなるハ悪し。小石あらバふるひて用ゆ。○按に。右の外又山川より流出たる細き砂ハ用てよし。海

河より揚たる砂ハ用ゆべからず。塩けありて枯るものなり

○田土稲を植る田の土なり。水草を植てよし。肥しにハ鱒など入てよし又自然に沼池など埋て園となりたるハ下湿地にて泥へなどの変じたる

なり。小石まぢりてかたまり。或ハ乾き又ハ湿すぎて土の性悪し。然ともよくふるひ土を高くして植れハよし。林檎にハ相応なり。又梨桃柿ば

らの類色よし。又はらんおもと牽牛子なでしこ色よし。桜草にハ此土に黒ぼくを合せ植れバ甚よし。夏など乾く所へハ洗魚水人糞等節々そゝぐ

べし。又しめりがちなる所ハ水はきをよくして時々壅たるかよし

○けとふ土根岸辺の土中より堀とる。稲の根数年を経て此土となると

云。又山を掘ても出るゆへ別のものともいふ。土の色黒して軽く。此土をほしてつゝのまたを加へねり合せ。意に任て石の形或盆の形などを

作。それへしのお石草つたの類をうへ付てよく生長す。又石菖など植水

ばちに入ハよく水を吸あけて勢よきものなり

#### 水の事

按に。夏月園中の植木に水をそゝぐる事。日陰になりて涼き時そゝぐ

べし。根もとへのみそゝぐべからず。地面惣たいへそゝぐべし。夕方な

れハ葉に水かかりてもよし。朝と昼中ハ葉に水のかゝるを忌。尤日中に

ハはちうへの類にても悪し。但し暑中鉢うへなどにハ忽乾て枯るもの

あり。その時ハ根廻へぬるまの水を。葉にかゝらぬやうにそゝぐべし。

又さし木のある所へハ心づけ節々水をそゝぎてよし。盆植の物ハ。大抵縁の下の土のしめり加減がよし。水を多くかけて。井の辺位の土にては

湿り過て根くさるなり

## (二) 肥料の種類 (「澆灌并培養の事」)

植物のより良い生育には肥料も欠かせないが、その種類は多く、また土壌や植物の性質に応じた使い分けが要求される。

江戸時代における代表的な肥料として、人間の糞尿を発酵させた下肥と、脂を絞ったイワシを乾燥させた干鰯が挙げられるが、もちろん、他にも様々な肥料が使用され、『草木育種』では二十種類以上が記される。使い方として、人間や馬などの下肥は、神社の境内への植栽、または神前に供える草木には使用を控えるところがあるのが興味深い。なかには櫛や頭髮の垢も肥料として、葉蘭や冬木の根回りに置くとあるが、果たして効果はあったのだろうか。

「按るに。山野自然に生ずる草木ハ実熟して自落腐爛すれハ。則その物乃肥となる也。冬木ハ葉繁て暑寒を厭。夏木は秋葉落て土を覆ひ寒を凌是自然の理なり。しかるを実を採る。或ハ葉を掃除などするハ理に逆もの也。故に手入培養の法を用ざれハ生長せざる也。花鏡云ク。人力亦以奪天功。と誠に然り。又曰。澆灌ハ人之需飲食也。不可太饑亦不可太飽。と云り凡草木に用る肥廿一品あり。後に審にす。又人糞馬糞などの穢物を嫌ものあり。種樹書ニ曰ク。花木有不宜糞穢者甚多シ。尤宜間用之。非其宜立二稿。と云り蘭百両金杜鵑虎茨杞杜衡などに糞を用事を忌が如し。又神社の庭或ハ神前に供する草木等にて。糞穢の物を用難事あり。かくの如き時ハ代に用る肥あり。干鰯灰汁油糟酒粕等を合せ腐して用ハ大抵同様に肥るなり。左傳ニ曰ク蘋蘩藎藻之菜。可薦於鬼神。と云これ水草にてうきくさ又もの類ハ糞汚に觸ざる故。清潔にして神に供すべしと云り。

○肥土 又臘土「農圃四書」ともいふ。拵る法ハ年々耕作する山畑の土へ冬至の後人糞をそぎ。寒にいてさせて乾し。又糞をそぎて乾す事三度。其後雨にあてぬやうに貯置春分の頃日中にさらし。度々切か

えす其時よく虫蟻の類。又草の根芥の類を拾捨てよし。是をすて置ハむれ腐て地むし。蚯蚓の類を生して害をなす「農圃四書菽菊肥土の法也」これを諸の草木菊などを植るとき交あわせてうゆへし

○三和土 地錦抄に合肥と名く。其法ハ野土三斗。赤土一斗。真土一斗。右三色よくまぜにしやうをふるひ。人糞一斗煉合せ五十日ほどねかして

つかふなり。用る時藁の灰又は糠を炒て切まぜたるもよし

○又曰。南に並木いけ垣煉堀のたぐひ高山などある陰ハ北陰とて必冷氣の地なり。一二尺も三四尺も湿気のほるもの也。此所ハ合肥多入てよし。魚洗汁などハ肥すぎて。草の性のび立花つき兼るもの也。合肥ハ後程段々肥の理なり。又曰草花ハ惣て冬中より。二月中旬まで肥を用へし。葉出て用ハ却て傷。若用度ハ合肥を用べし。かけ肥ハ必きろふなりといふ。按るに生て後かけ肥を用も品によるべし。植て後肥不足に見ゆれば。物によりてかけ肥を用てよし ○花鏡ニ云ク八月草類宜肥木類忌肥

○溝池けの泥井水 種樹書ニ云ク。香草などにて。糞を用ひがたき物にハ。みぞいけの泥水。或ハ米泔水などをそぎてよしと云う。又溝の土を揚ざらし乾てよくあらひ。石竹。牽牛子。の類によし。又黒く土を等分に合て桜さうによし

○厩肥 まやげごいともいふ。代の内へ入る肥なり。農民おほくこれを用ゆ。其法ハ。冬中人糞に灰をまぜ合せ腐し。種をうゆる時まづ厩に馬の踏たる糞を厚くしき。其上へ砂をまき。其上へ糞汁をそぎて諸の菜類の種をうゆれハ。下より温気のはるゆへ早く生る也。又畑ハ苗をうゆる時も、かくのことくしてうゆれハ。物によりて始終肥に及ハず又藁の代りに馬糞を用るもあり

○人糞 諸の草木の肥ハ。人糞を第一とす。久くきく事他の肥に勝れり。何の肥にも少しづつ、まぜてよし。花鏡ニ云ク。正月七分糞三分水二月六文糞四分水。三月対和。四月四分糞六分水五月三分糞七分水。八月四分



糞六分水。九月対。十月六分糞四分水。十一月七文糞三分水。十二月八文糞而止。○地錦抄云。人糞一桶に水二桶入五十日ほど置いて青き水のごとくになりたる時取るを云。按にかけ肥ハ雨を催たる前にかけて雨降バ別てよし。尤冬中肥土へ入るにハ水を少しハ割たるがよし。何人も糞ハよく腐たるがよし。然るを今俗傳に寒肥と云て。草木何にかざらず用ハ品によるへし譬ハ虫などハ。冬中ハ蟄して食を求ず春暖氣になりて食を求む。草木も又此ごとく冬ハ寝が如し。春木至て眼を含む時ハ瘡の如し。此時肥を用ハ渴するに水を與が如し。大抵芽を生る前に用べし。弱き草木などに。寒中強き肥を用ハ却て傷腐ものなり。但し木の類ハよし。又植かへて直に肥をそぐ事悪し。若用た、ハ肥土を土へまぜ植てよし。根づきて後肥を用べし

○人尿 菰芥の類に用ゆ。よく腐して用ゆべし。種樹書に云。瑞香などハ湿を嫌。根もとに蚯蚓ある時ハしめる也。此時小便をそ、げバみ、づ皆死といへり

○鰯「和名抄」又鰯魚「閩書」ともいふ。肥に用るハほしかといふ。ごまめより大なりごまめも田つくりも皆用てよし。地錦抄に云。水に入れて置くさらしても用ゆ。大方ハ其ままでよし。花壇綱目に。下肥にいたむ草木に用へし。よく炒粉にして用といふ。按るに。ほしかハ白にて挽粉にして用ゆべし。然らざれば鳥獸皆食ふなり

○洗魚水 地錦抄云。魚洗汁ハ。器物にため四五日置いて用べし。魚の腸ハ久敷さらして用ゆ。花壇綱目云。根に肥の入かねる草に用ゆ。緒草ともに根廻へ少ツ、用ゆといふ。種樹書曰。月桂花葉常ニ若キ虫食者。以魚腥水ヲ澆之乃止。又曰。種香葉ヲ以洗魚水ヲ澆之。則香シ而茂ス。○地錦抄云。南に日陰なく終日乾所ハ熱地なり。魚の洗汁水こへうすくして少しづ、かけたるハ。陰氣をまして。土に湿をふくみてよし。合肥油槽など悪し。土乾き植物枯るもの也。又石の如なる赤土又ハ焼土出火などにて。焼くづれたる所ハ一二尺土の性なし。是虚土なり。

魚洗汁水ごえなどにて。土を補潤たるがよし。焼土ハあまり性なく虚すぎて。つよき肥ハなづみて悪し。魚の汁時々かけ米泔水を節々そ、ぐべし又石砂多き地ハ実地なり。忍土多く切まぜて。魚洗汁だし肥鰯肥油槽等の。おもくつよき肥ハ悪し。すべて肥過分なるハ。必植物いたむ。地肥たると見ハ肥無用たるべし。此見合第一なり

○灰 竈又ハ火爐の灰も人糞に合せくさらしてねかし置。瓜類茄麦粟黍稗等の肥に用ゆ。花壇綱目云山慈姑青らん水仙等にハ藁灰を用ゆ。其外くだし肥にまぜ少しツ、用ゆ

○酒糟 酒かすに粃糠を切まぜ。団子のごとくに煉貯置遣ふ時に水にてとき。人糞を合せ稲田に入てよし。又紫藤葡萄などの蔓長く出る物によし。又松の勢悪きに根廻りへ入て又繁茂するなり種樹書云。種藕以テ酒糟塗ハ之盛

○油糟 胡麻の油粕よし草木の葉の光沢をよくす。故に蘭。はらんに用てよし。花壇綱目に云。荏の油糟ハ牡丹芍薬の類少々つ、用てよし。但シ秋冬ばかりなり

○陟釐 夏の内よくくさらして。白くなりたる時畑へ切まぜ。八月にいたり麦をまくなり

○米泔水 米をとぎたる水なり蘭百両金はらん硃砂根紫金牛茶等を用てよし。又香氣ある草木ハ溝泥水にしろミづを合せそ、ぎてよし。また潺湲の溝の土乾て篩ひ植る土に交用てよし

○糠 炒て人糞にまぜ用ゆ。粃糠ハ酒粕に人糞を合せ田の肥に用ゆ。又もみぬかを其ま、孟宗竹の根に置いてよし

○豆餅 豆腐の滓にてからなり。よくくさらして用ゆ。土へまぜて又肥土となす

○馬糞 花壇綱目云。寒氣にいたむ草木によし。又暑氣を嫌草にも根廻りへ置べしといふ。又牡丹の根まわりへ冬の内多く置いてよし。馬糞ハ多く用ゆる故貯へ置べし

○馬尿ハ花壇綱目云人尿より和なり諸草に少づ、用

○獸肉の類 涅槃經二曰ク。如ハ橘得單ヲ其ノ果子多と云り單を人糞汁につけ置き。くさりて浮たる時柑類の根へ埋る時ハ実多し又猫の肉。竹によるしき事。物類相感志に見へたり。其外諸の獸よく腐爛たる時根廻りへ埋てよし。古き皮の類もよし

○牛糞 桃を植る時牛尿に土をまぜ埋置。春になり植かへてよし

○羊尿 立夏の前。羊尿を泥に合せ蓮をうゆる時ハ花多し。花鏡ニ云ク。報春先用羊鹿尿ヲ和水澆ク。又暑月澆 冷茶ヲ。

○猪糞猪尿 種樹書ニ曰ク。木犀當シ猪糞ヲ。又冬青樹凋瘁。以ヲ壅スル之則茂。一説猪溺灌之又曰凡種花欲得花多。須用肥土。秋冬ノ間壅根。春來着花自然盛。以猪尿ヲ和土令發熟為肥土。

○鶏糞 種樹書ニ曰ク。鶏尿壅茉莉ニ則盛。壅百合ニ則甚滋生ス。といふ今 專 烟草燈心草龍鬚草の肥に用ゆ。又菊櫻草等の肥にまぜ用れハ。花の色をよく出す事妙なり。尤 緒の鳥屎皆よし

○介類 蛤蜊文蛤其外 諸 介類。桶へ水を入漬置。腐たる時殻をとり揚。其水を用ゆ松に用てよし

○塵埃 燕子花石菖蒲蓬草烏芋慈姑等の水草に入てよし

○茶滓 暑氣にいたむ草木の根廻へ置てよし。南天蘭類に置べし

○草綿子 桑の根廻へ入。又緒木の根へ入てよし。又油を搾りたる粕も用てよし

○梳頭垢膩 はらん。又冬木類の根廻へ置てよし

(三) 植木鉢の注意点 (登盆の事附り養花挿瓶のの法)

江戸時代の園芸において特筆すべき点は、植木鉢の生産と使用の拡大だろう。植物の移動を容易にした植木鉢は、季節の花木や草花を商品化し、人々は、屋外のみならず、屋内においても植物に親しめるようになった。また、オモトや変化著しいアサガオは、植木鉢により持ち寄られ、

比較、位付けの対象となつた。

もつとも、植木鉢というきわめて限られた容器内での栽培は、地植えよりも技術を要する場合が多い。ここでは植木鉢(「登盆」「盆栽」)における栽培の注意点を引用するが、鉢内の湿り気をいかに適度に保持するか気遣いは、現代と変わることがない。

「按に。盆栽ハ土乾す湿す。よく下へ水の抜るを第一とす。陶器にても又花盆にても。水抜の穴肝要なり其穴ハ漏斗の如。少も水のためりなきをよしとす。穴の所内へ引込たるハ。廻りへ水滯て悪し穴の所低がよし。扱穴を覆に。何の甕黒にてもくだき。其ま、ふせて穴を覆ふべし。文蛤などハ鉢によりて。水抜悪事あり。花鏡に建蘭を植る法に云。用盆先ツ瓦片ニテ填底ヲ。後以煉過土ヲ覆上。とこれ妙法なり。蘭百両金などを鉢へ植るにハ。盆の底の穴を大きくして其上を覆に赤土の黄めにて。かたまりたる土をあらくくだきふるひて。其篩に残たる粗土を入て植れバ。水よく抜て根腐事なし。物によりて植る土へ。合肥を切まぜたるもよし。惣て植る法ハ。まづ陶器を下に置。植木の根元を以てはんどへあてがひ。四方より土をさらくと入。土一盃になりたる時。前後左右へ暫動べし。土の空虚のなきためなり。植て一兩日多水をそ、ぎ。或ハ大雨に遭事を忌。土のかたまるを恐るなり。肥を嫌草木ハ。年々土をあらたに入替てよし。又肥を好物ハ。土の乾めなる時先。土を箸の様な物にて和げ置。よくねしたる肥を。根廻りへそ、ぐべし。又鉢植を地に置て久く居つく時ハ。水抜の穴より。蚯蚓升りて鉢の内にすむときハ。必湿てついに。根腐する事あり。節々置所を替てよし。其蚯蚓を去法ハ後に見ゆ。又蘇鉄松の類ハ棚にのせ置ても。ま、蟻の付事あり。早々土を取替てよし」



## (四) 虫害と駆除方法について (除虫法并虫の図)

植物の栽培において、虫害は避けて通ることの出来ない問題である。稲や麦、野菜や果物といった農作物へは、時として甚大な被害をもたらす、植木屋では、商品となる花木や草花の価値を著しく落とし、キクやアサガオの花競べにおいては、位付けはおろか、出品もままならない状態に追い込まれたらう。ここではキクの栽培以外に、当時見受けられた害虫とその駆除方法を引用する。害虫の駆除は、栽培の環境が限定されがちな植物による生業を確実に成立させるためにも、必要不可欠な技術である。82ページには「虫の図」を掲載したので、あわせて参照されたい。

「種樹書」二曰ク種木無時。戴毛虫ヲ。於根下ノ皮。以甘草末擦之亦佳。又曰。臘月二十四日。種揚樹不生虫。又曰。斫松樹。五更初斫倒便利去皮則無白蠟。又須擇血忌日以斧敵之云。今日血忌。則白蠟自出。又曰元天未明火把將火把ヲ於園中百樹土。從頭用水燎過。可免百蟲食葉之患。又曰園圃中四傍。□種決明草蛇不敢ヲ入「常正按にハブサウと云ものあり漢名望江南又蛇滅門草とも云。此草琉球より来る。琉球に蛇多し。此草を植て蛇を避ると云。琉球にて蛇の事をハブと云といへり。茲に云処の決明草ハ本草綱目の決明なり。是もハブサウの類にして形甚相似り。故に決明草も又蛇を避ることをあるべし」又曰。濯洗布衣灰汁澆瑞香。必能去蚯蚓且肥花。以瑞香根甜灰汁。則蚯蚓不食而衣垢又自肥也。又曰柑樹為虫所食取蠹巢於其上。則虫自去。又曰。果樹有蠹出者。以荒花ヲ納孔中則或納百部葉ヲ。又曰。果木有虫蠹處。以杉木ヲ削小塞之其虫立ニ死。又曰。生人影掛樹上。鳥不敢食其實。又曰。桃李蛙者以煮猪頭汁冷澆則不蛙。又曰。果樹生小青虫。打蜻蛉掛樹自無○按に。白蠹未置花根下。辟虫易活。凡樹をうへかへる時根の下へ大蒜一ツ。甘草少ばかり入て植ハ。久く虫を生ぜずと花鏡に見へたり。凡草木に生る

虫。甚多し。其内大に害をなす虫をここにしるす也。土中に古根。芥などあれバ虫を生る也。間を遠く植て。風を入り様にすれバ虫少し。木の類ハ古枝を切すて風を入べし。又肥ハ烟草の茎を切まぜて用バ虫生ぜず○黒小地蚕。又芽きりむしとも云。其形いとむしに似て小さく単色なり。早春の頃土中に居て朝など出て。草の芽を食ふ。よく見てひろふべし。又土中に蟻螯あり。此類ハ皆草の根を嚙切ときハ忽枯る也。甚害をなす。根廻りの土中を尋て取捨べし。虫多き時ハ石灰を水にてとき澆バ死す。暫ありて其石灰に水をそぎ去べし○木蠹虫ハ。形長く色黒し。林檎無花果。などの木の心を喰。皮の所へ小き穴をあけ。鋸屑の如きものを多く出す。此穴へ硫黄を粉にして入てよし。又針金を穴より入て突殺もよし。又鉄砲の焰硝を捻紙により込。穴へさし入て火を付けハ。忽穴の中へ火氣を通じて虫残す死す。又虫の穴へ燈油をさしてよし。此虫諸木に付ものなり○草木ともに風入あしき所にハ木虱。又ありまきともいふ虫。多新葉の所へ付。日々にふへてひと。とり巻ときハ芽枯るなり。其時ハ虫の聚り居る所へ。烟草の水を度々澆てよし。又鰻鱺の骨を焼て煙てよし。又麦藁の灰をふりかけてもよし。又常の灰にても度々振べしあぶらむし生ずる時。必蟻多く聚り虫ヲをふやす故。蟻を払捨べし。又鼈甲を其邊へ置ハ。蟻集るを遠く持行て払べし。又砂糖を置。蟻を聚て取捨もよし。花鏡に云。蟻穴以香油或ハ羊骨引出之。又蟻做窠須置一浅盆坐水ニ使蟻不能渡。といへり○古虫といふものあり。百両金紫金牛相橘。橙類の葉のうらに。砂の如小き虫多付ときハ葉落て傷なり。つき初りなれば刷毛を以て水を澆洗てよし又柑橘建蘭類に疣の如にして扁虫を生ず群芳譜に。是を蘭蟲といふ。これを去法ハ魚洗汁をそぎ或ハ大蒜を摺て水に解筆を以て洗べし○土中に生ずる糸虫と云あり。形糸の如にして長さ二三分色白し。是肥強して湿熱より生るなり。草の根を腐かすものなり。集り居る所を土ともに取捨てよし。○桃樹に生ずる小きき蟻螯あり。初二分ばかりにして色薄青し

掃帚にて払へし此虫桃実の皮よりくひ入て実を喰○螟蛉ハ苾蘿葡萄芥などに付青虫なり。毎朝拾捨べし。○蟻蝻ハ夏中大なる蝶飛来て葡萄薯蕷類の新枝へ卵をうみ付て去なり。二三日めに一二分のいもむしとなる。青きもの茶色のもの黒きものあり。生長すれば指の大きさになり。背に星ありて眼のことし○橘虫と云あり橘柑 橙 柚 茱萸 類の香ある木に多し。これを蝶飛来て卵を新枝へ着る也是は頭大にして蚕の如く。此を挾ハ黄赤色の角を出し其臭し○尺蠖も諸木に生ず。よく見て拾取べし

○毛蟲に種々あり梅桃 李 林檎などの枝に卵を着置なり。形鯨のことし。冬の内取捨べし。此卵三四月頃かへりて虫となり。木の又へ果をかけ数百あつまりて新葉を喰ふ其形あさき色にして嶋あり是を取法ハ燈油を筆か布に浸。虫の巢を拭取べし。又油をたゞ澆てもよし。虫忽死す○樹の根もと。或ハ割竹の内。又ハ板屏壁などの日陰に。綿の如にして長く産付たる卵あり。削たるべし。捨置ときハ。春になりて皆小き毛虫となる也。此類に毛多くありて。背に金色の光あるを半夏太郎といふ枝或ハ樹の皮に居るなり。○又八九月頃。桑。櫻。なつめかしわ。類の木又草の葉に色生ずる桑樹虫あり。初ハ蜘蛛の巢の様に見ゆ。葉を喰筋をのこして。其葉茶袋の如し。巢の小なる時枝を切捨べし。捨置バ冬に至て。虫皆根もとに下り。枯葉の下。或は土中に寒を凌て。春に至て草木の芽出を喰。又桃梅林檎等の実を食。大に害をとること。

○林檎海紅等に一種の毛虫を生ず。三四月頃一葉巢になり。段々ふへて一枝皆蜘蛛の巢の如になり。葉を残さず喰尽。巢の小なる時葉を取枝を剪て遠く捨べし其ま、置時ハ枯木の姿となり。或ハ云此虫後にミのむしとなりて。外の木へ移葉又実を喰害をなす

○菊虎ハ形蟬に似てほそ長し。菊艾類の宿根より生ずるといふ。故に菊ハ古根を植べからず。四月頃早朝に出て菊艾類の若ばへを吸からし。後へ卵を産置なり。其吸たる後二ヶ所横に筋あり。下の吸めより折取て。

茎を二ツに割ハ。中に黄色の長き卵あり其ま、置時ハ菊の心に喰入て蛙となる。秋になりて菊俄に枯るもの也○さんせうむしハ。形てんとうむしに似て黒く甲羽あり。夏の頃瞿麦の花を喰。又柳に集りて葉を食ふ。又酸漿にも集り葉を食もの也。節を払べし○蛞蝓蝸牛ハ草木の葉を喰事毛虫の如し遠く捨べし○腹鼠ハ草木の根を掘あげ。害をなす珍重なる植物ハ竹にて簀をあみ。土中に埋其中に植バ来らず。又妙法あり。海參を切て所へ埋置バ。遠く逃去と云。なまこハ虫を除ものなり○鉢うえ類に蚯蚓升ときハ。水拔悪なり植物くさるものなり。無患子の殻を煎。其汁を澆バ皆死す。又生なる小便を澆バミ、ず逃去もの也。後へ水を多くそ、ぐべし

## おわりに

江戸時代における植物と人間との関わりは、名木や花の名所の観光地化、大名藩邸に作庭された数々の庭園、植木鉢の普及拡大による植物の移動がもたらした、植物による屋内装飾などに拡大、深化した。続く近現代においてもその形を多少変えながら、今日にまで続いている。

本来は自然に存在する植物は、「園」「花壇」「鉢」で区切られた途端に、人間のための存在となり、その生体の維持も人間の手に委ねられる。幕末期に來日した外国人は、大名屋敷や寺社内の庭園をはじめとした緑地を広大な公園に例えたが、その緑地は既に人間の管理下に置かれた植物によるものである。範囲が限定された土地における植物の適切な管理には、相応の技術を要する。外国人が遠目に眺めた緑地には、数多くの植木屋や、岩崎灌園のような植物を追い続けた人物が、土を耕し、種を蒔き、生育を観察し、開花に胸をなでおろしていたのだろう。江戸時代の後期、植物と人々の関係がより近くなった当時における園芸について、余すことなく確実に記録し、振り仮名付の文章で広く普及を志したのが『草木

育種』であると考えている。

それだけの著作に対して、今回のきわめて部分的な紹介に留ったことを課題とし、今後も解読を継続し、同書についてさらに調査を進めていきたい。

## 注

- (1) 牡丹については「近世では大抵の人が珍重し、花の詭異<sup>あやしくふし</sup>なのを求める。みな秋、冬に移し接ぎ、壤土で培養する。春になると盛んに開花する。」とあり、その具体的な方法として、「夏月に川<sup>かわ</sup>ごみを探り「晒<sup>ひ</sup>し乾<sup>か</sup>して」古い圃<sup>はたけ</sup>土、細砂「以上三品」と篩<sup>ふる</sup>いませ、八、九月、紅芽が出たのち、移し栽<sup>う</sup>えてこれで培養する。糞<sup>か</sup>溺<sup>じやく</sup>を用いてはいけない。冬月に油渣<sup>あぶら</sup>を少し根の傍<sup>わき</sup>寺<sup>でら</sup>に入れ、あるいは鮮魚の洗<sup>せん</sup>汁<sup>じゆ</sup>を灌<sup>かん</sup>いても佳<sup>よ</sup>い。四月に花を開く。花が落ちて甕<sup>わ</sup>が破<sup>やぶ</sup>れ、七、八莢<sup>さく</sup>のかきつばたは子を結<sup>むす</sup>ぶ。八月に莢<sup>さく</sup>が裂けると中に豆の大ききぐらゐの黒色の子十粒ばかりあり、まさに落ちかけのときを候<sup>うか</sup>い、採<sup>と</sup>つて直<sup>ただ</sup>に蒔<sup>ま</sup>く「もし久しく経つと生えにくい」春に粒を戴<sup>お</sup>いて生え出るが、出はじめの豆に似ている。五、六年して初めて花を見ることが出来る。すべて珍花は子種<sup>こしゆ</sup>えから出る。」と使用する肥料や実生栽培の注意点を述べる。（寺島良安著 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会 16』東洋文庫521 平凡社）
- (2) ヤブコウジ科の常緑低木。果実は球形、赤熟。白熟、黄熟する種類もある。常緑、かつ実をつけている状態が長く続くことから、子孫繁栄の象徴とされた。
- (3) 岩佐亮二「菊の成立と発展」(『菊花譜 園芸文化とその歩み』主婦の友社に所収)によると、江戸時代の前期から中期には、実生栽培による菊の新花が注目を集め、投機の対象となった。小林一茶はその狂騒を「勝った菊大名小路を通りけり」「負けた菊をひとり見直す夕べかな」と詠んでいる。なお、利益を生み出す菊の新種の保存については、『草木育種』にも記述がある。
- (4) ユリ科の多年草。葉は根茎から叢生し、大きさや形、斑の種類が多岐にわたり、鑑賞価値が高い。カラタチバナと同様に常緑であり、縁起物として扱われることが多い。
- (5) マツバラ科の植物で一科一属一種。シダ植物の仲間とされるが、根・葉を持たない。茎の形や模様の種類は多く、『松葉蘭譜』には一二二品種が掲載されている。
- (6) ラン科の常緑多年草。暖地の岩または古木に着生。茎は多数の節を持ち、線形の葉を互生する。強壮・鎮痛・健胃剤に用いられる。洋蘭のデンドロビウムの仲間。
- (7) メギ科ナンテン属の常緑樹のうち、葉や枝の形などの変異種。特に、糸状や巻き込みの形に変化する葉に特徴がある。
- (8) 小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べ 園芸文化の到来』（青幻舎、二〇〇八年）
- (9) 同
- (10) 「杜若<sup>つばき</sup>るい」には「かきつばたは当年花咲きたるは来年消えて不生。花立のきわに付きて、ひおうぎの様な葉あり。これに来年花咲く故に買調<sup>かひてう</sup>うるに心を付くべし。能花の咲きたるにつねのたくさんなるかきつばたの葉を様々そえて大かぶにして売る。然れば来年はかの能花立はくさりて下なるつねの花咲く。能く吟味あるべし。」とあり、良い花の株と葉の株を人工的に組み合わせた販売について、注意を促している。また、セキシヨウ（石菖）でも葉に油を塗布して艶を出し、小株を寄せ集めて大株に見せかけて販売されていた。つまり『花壇地錦抄』が執筆・刊行された一七世紀後半には、既にこのような販売手法が、植木屋の目に余るくらいに行われていたことが分かる。
- (11) 平野恵「園芸の達人 本草学者・岩崎灌園」（平凡社二〇一七年）P. 8～9

